

## アスリートにおける足関節外側靭帯損傷後の 足根洞症候群発症の要因

○森尾 太志<sup>(MD)</sup> (もりお ふとし)<sup>1)</sup>, 森本 将太<sup>(MD)</sup> <sup>2)</sup>, 井石 智也<sup>(MD, PhD)</sup> <sup>2)</sup>,  
中山 寛<sup>(MD, PhD)</sup> <sup>2)</sup>, 大西 慎太郎<sup>(MD)</sup> <sup>2)</sup>, 吉矢 晋一<sup>(MD)</sup> <sup>1)</sup>, 橘 俊哉<sup>(MD, PhD)</sup> <sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 西宮回生病院 整形外科

<sup>2)</sup> 兵庫医科大学 整形外科

### 【目的】

アスリートにおける足関節外側靭帯損傷後に足根洞症候群が発症する要因について知ることである。

### 【対象と方法】

対象は2017年4月から2019年10月までに当院で足関節外側靭帯損傷と診断し3か月間の保存療法を行ったTegner activity scale 6以上の例とした。陳旧性足関節外側靭帯損傷例や関節内外病変がある例は除外した。対象の中で3か月の保存療法後に足関節外側痛が残存しなかった例をN群、足根洞症候群が発症した例をS群に割り付け、この2群間で各調査項目につき比較検討を行った。3か月の保存療法後、足関節外側痛が残存した例に足根洞注射を行いVASが40mm以上改善したことを足根洞症候群発症と定義した。調査項目は、性別、足関節外側靭帯損傷時の年齢、BMI、Tegner activity scale および保存療法開始後3か月での足関節可動域（背屈・底屈）、足関節不安定性の有無とした。

### 【結果】

N群は24例24足、S群は14例15足であった。性別、足関節外側靭帯損傷時の年齢、BMI、Tegner activity scale、保存療法開始後3か月での足関節可動域に両群間で有意な差はなかった。足関節不安定性はN群で24足中7足(29.2%)、S群で15足中12足(80.0%)に認め、両群間に有意な差があった。

### 【考察】

アスリートにおける足関節外側靭帯損傷例において、足関節不安定性が残存することが足根洞症候群発症の要因になることが示唆された。